有機栽培ほ場の畦畔にイブキジャコウソウを導入する場合 定植１年目は定期的な除草作業が必要（大熊町）

福島県農業総合センター　浜地域農業再生研究センター

事　業　名　営農再開支援事業
小 事 業 名　営農再開に向けた作付･飼養実証
研究課題名　イブキジャコウソウによる畦畔管理
担　当　者　小椋智文、佐藤越萌

Ⅰ　新技術の解説

1　要旨

イブキジャコウソウは地面を覆うように生育するため、法面の雑草管理の省力化や景観美化等が期待され、栽培マニュアルも作成されている。そこで、水稲有機栽培を想定したほ場において除草剤を使用せず、ほ場畦畔でイブキジャコウソウを１年間栽培したところ、定期的な除草作業が必要となり、除草作業に 22 時間/a/人を要したが、マニュアル並みの被度を確保できた。

（１）５月中旬に親株から健全な挿し穂（5cm 程度）を採取し、育苗培土を充填した 36 穴セルポットに挿し木し、育苗した。5 月中旬に刈払い機で除草後、幅 1m の畦畔へ幅 1m の防草シートを敷き、防草シートに 40cm 間隔の千鳥状に 5cm 程度の切れ込みを入れて定植した（図 1)。
（２）防草シートの外側からアキノエノコログサ、メヒシバ、ホソアオゲイトウ等の雑草が侵入した（図 2)。このため、7 月～9 月に 3 回の刈払い＋手取り除草が必要であった。
（３）定植 1 年目の除草作業時間は、法面での栽培を想定しているマニュアルでは 3.2 時間/a/人とされているが、本実証では 22 時間/a/人となり、多くの時間を要した（表１）。
（４）上記作業を行った結果、生育は順調に進み、9 月末時点で被度は 85%となった（表２)。

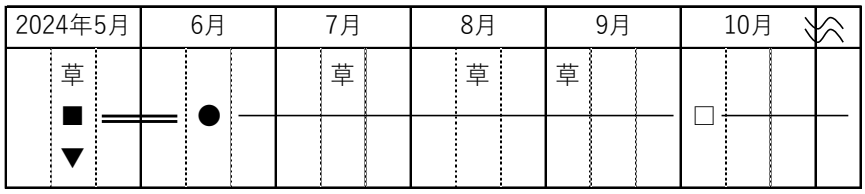
2　期待される効果

（１）有機栽培ほ場の畦畔にイブキジャコウソウを導入する際の参考となる。

3　活用上の留意点

（１）定植 1 年目は株養成が目的のため、除草作業が必須となる。2 年目以降は目立つ雑草があれば抜取る程度の管理でよい。
（２）畦畔の幅が 1m 以上の場合は、幅 50cm の防草シートの増設し 1 条分を追加定植する。
（３）苗の購入や育苗の詳細についてはマニュアルを参照すること。

Ⅱ　具体的データ等



草：除草、■：防草シート設置、▼：挿し木、＝：育苗期間、●：定植、
－：生育期間、□：防草シート撤去

図１　定植１年目の栽培暦

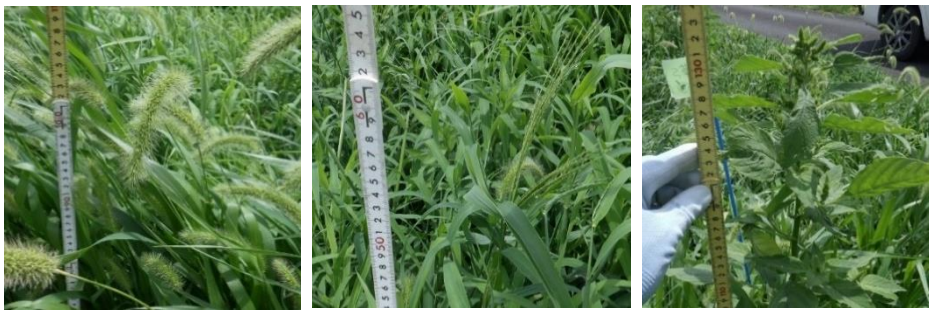


図２　イブキジャコウソウと競合する雑草（7/29 撮影）
（左：アキノエノコログサ、中央：メヒシバ、右：ホソアオゲイトウ）

表1　定植1年目の作業時間　（時間/a/人）

被覆作業※1	育苗※2	定植	除草※3	合計
6.5	8.0	6.3	22	43

※1　防草シートの設置・撤去作業
※2　セルトレイ挿し木、かん水、遮光幕開閉
※3　刈払い、手取り作業。1回目 5/8（防草シート設置時）、
2回目 7/29,30、3回目 8/14,16、4回目 9/2

表2　定植1年目のイブキジャコウソウの生育状況

最大株径※1（cm）			被度※2（%）		
8/1	9/4	9/30	8/1	9/4	9/30
29	46	53	17	63	85

※1　放射状に伸びる株を真上から見た時の最大径
※2　真上から見た時の防草シート内でのイブキジャコウソウが被覆している面積の割合

Ⅲ　その他

1　執筆者

小椋智文

2　実施期間

令和 6 年度

3　主な参考文献・資料

（1）［栽培マニュアル］岩手県農業研究センター，公益社団法人 岩手県農産物改良種苗センター，イブキジャコウソウで法面を被覆して畦畔管理を省力・軽労化（2018 年 4 月）